月刊ナイトバグ　雪虫降り降り黒幕～型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年11月号
趣味と擬態の王国
「パロディ」特集
読切り作品
SS :Salka/くろと
漫画:斑/羅外/豆板醤/
猫屋敷/13
連載作品
漫画:Step/草加あおい/
ぼこ/クロツク

THE PRINCESS
OF FIREFLY

月刊ナイトバグ　2010年11月号

Cover design　小崎

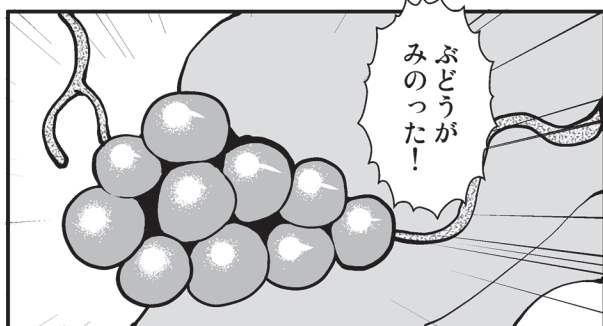
目次 (3p)

ミスリード

著者：くろと

「殺人事件、そういえばありましたね。地上からやってきた人間と妖怪を地霊殿に泊めて差し上げて、翌日になると人間がベッドで死体となって眠っていました。犯人は誰でしたか？　ふふ、誰の思考も容易く悟れるのに、こういうときは自分の能力が分からないものですね。……もっと正確に？　いいですよ。思い出せるだけ思い出してみましょう。地上からやってきた人間――仮にAさんとしましょう――Aさんは地底の妖怪たちに追われ、この地霊殿にまで逃げてきたのです。心を読む限りにAさんは地上であくどい商売で儲けていました、ですが悪事が露見し、善人たちに追われる羽目になったのです。ほとぼりが冷めるまで地底に隠れるつもりでしたが、運悪く地底の妖怪たちに見つかり、追われてしまった。ということでした。事情を知った私は不憫に思い、地霊殿への進入を許し、温かいシチューで出迎えました。Aさんは嬉しそうにシチューを頬張っていましたね。それもそうでしょう、中身は獲れたばかりの新鮮な腐肉でしたから。Aさんがシチューを食べ終えたころ、ふと、私は時刻が気になりました。そうするとAさんは懐中時計を忍ばせていたので確認をしてくれました。――ところで懐中時計というのは、どうにも正確無比ではありませんね。発条を巻き忘れるとずれてしまいますから。そのときもAさんは一時一〇分と教えてくれましたが、時計で確認すると、針は一時三〇分を指し示していました。実に二〇分も早いのですから、当てにするのは不味いでしょうね。さて私は時刻が二時なってからAさんを泊まる部屋に案内しました。あてがった部屋は三階の隅にある部屋で、家具等は薄黄緑のカーテンの掛かった窓が一つと同系色のベッドが一台、錠前に鍵が差し込まれた引き出しのある机に、クローゼットが一棹と、最低限を揃えた部屋です。長らく使っていない部屋だったので、妖精たちに掃除させせました。Aさんが部屋に入室し、午後二時半、妹が地上の友達を連れて帰ってきました。友達というのはリグル・ナイトバグという少年のような少女で、妹はリグルさんをいたく気に入っていました。妹はリグルさんを自室に泊めると我が侭をいうので、部屋は準備しませんでした。私が自室に戻って読書を始めると、大体一〇分ぐらいで、なにやら言い争いのような激しい大声が響いてきました。でも二分と経たずに静まったので、私は読書を再開しました。読書に一区切りがついたころ、私は夕餉のメニューを考える為に自室から出て、ペット達の様子もついでに見に行きました。お燐は一階のゲストルームで、拾ってきたとおぼしき人骨を磨いていました。嬉しそうな笑顔と丹念に研いてるさまを見るに、あれは盗れたてでしたね。集中しているようなので声を掛けても反応しませんでした。次に屋上へ出向くと、お空が――冷蔵庫から盗んだのでしょうか――肉を食べていました。私に気付くと笑顔で「おはようございます！」と挨拶してきたので、私は『もうお昼よ』と教えましたね。それから夕餉のメニューは何がいいかと聞いてみると、『うーん。お肉はもう食べ過ぎたからいい』と答えましたよ。少し悩み、私は妹の部屋に向かいました。扉をノックすると、『はーい』と返事が返りました。友達も居るでしょうから、扉の前で用件だけを簡潔に告げると、『お姉ちゃんの好きなものでいいよー』と答えてくれました。最後に泊めているAさんの部屋にいきました。ですが扉をノックしてみても、Aさんからの返事はありません。不思議に思いもしましたが、ドアノブの隙間にカードが挟まっていました。引き抜いてみると、《起こさないでください》と書いてあ

りました。私は眠っているものと思い、その場を後にしました。さて肝心の夕餉にはさっぱりとした刺身を用意することにしました。私がキッチンで調理を始めたのは午後五時ごろです。刺身は単に食材を切り分けるだけなので比較的短時間に出来上がりました。なのでデザートにと、昨日のうちに作って置いたカラメルプリンを用意してみました。出来は上々、食卓に料理を運び、私は妖精たちに皆を呼びにいかせました。最初に現れたのはお空です。お空は料理を見るなり、『お肉じゃないの？』と言いましたね。それから妹とリグルさんが――そうそう二人は喧嘩でもしたらしく、険悪な雰囲気でした――最後にお燐が現れました。お燐が最後だったのは、Ａさんが現れなかったからです。Ａさんを呼びに向かった妖精は、扉をノックしても返事がなかった。と言いました。まだ眠っているようでしたので、私たちはＡさんを待たず、午後六時に晩餐を開始しました。三〇分ぐらいで晩餐が終わり、最初にリグルさんが部屋に戻りました。続いてお燐も、妹に関しては晩餐の途中で消えていましたよ。お空だけが残り、私と他愛もない雑談をしました。雑談が終わり、私とお空も部屋に戻ったのです。私はその日の日記を雑に書き記し、また読書を始めました。黙読が終わったころには夜も更けていました。といっても地底では空で時刻を確認できないので、あくまで眠気を伴った感覚からの判断です。そのため私はシーツを張り替えたベッドに入り、目を瞑りました。程なくして私は欠伸をして眠ったのです。眠ってからそれほど時間が経っては居ないと思います、三階で物音がし、私は寝惚けながらも目覚めました。廊下に出て、階段を上ると、Ａさんの部屋の扉が開いていました。覗いてみると室内には誰も居らず、窓は閉まっていました。私がＡさんが起きたものと考えて、夜に出歩くのは危険ですから、探し始めました。貴女も知ってのとおり、三階と二階に部屋はそれぞれ一二あり、一階にエントランスと客間、大広間、台所、そして近場に露天風呂があるため、普段は使われない大浴場があります。私は先ず、エントランスに向かい、門番を務める妖精にＡさんが来なかったか、聞きました。返事は、いいえ。それで少なくとも外に出てはいないと分かりました。それから数十分ほど探しましたが、Ａさんは見つかりませんでした。もう一度、部屋に戻ってないかと思い、Ａさんの部屋に向かいました。すると扉が閉じられています。ドアノブを握ると、鍵が掛かっていたので、Ａさんが戻ったものと思い、安心しました。そういえば、扉に虫の死骸が落ちていましたね。けれど掃除が行き届いてなかった。と反省し、私は自室に戻って今度こそ深い眠りにつきました。翌朝、私は妖精によって起こされました、日常なら妖精が私の部屋に入ることなどありえません。非日常的な妖精の行動、――心が慌てふためいているせいでしょう、読心に失敗しました。何事かを口頭で尋ねてみると、妖精は乱雑な言葉を繰り返すばかりで、的を得ません。業を煮やした妖精は私の袖を引っ張ったのです。そうして案内されたのはＡさんに与えた部屋の前でした。すでに一〇を超える妖精が群がっており、掻き分けるように扉の前に行くと、合鍵を使って開錠されていました。入室すると、地底では珍しくもない臭いがしており、これはとベッドを眺めると、件のＡさんが死体となっていました。それと熟考するまでもなく部屋は荒らされていました。錠前のついた引き出しは壊され、無理にこじ開けられて中身を取り出され、部屋のそこらに散らばっていました。――記憶を掘り返すと、重要そうな書類と空の封筒が数十通、銀貨が六〇枚、金をあしらった指輪が二個、銀製の耳輪が三組、午後六時一〇分で止まった懐中時計、その他に高価ではないが価値のありそうな小物が数点、より高価なものが犯人に掠め取られたのは明らかでしょうね。私はとりあえず騒々しい妖精たちを室外に追い出し、死体を確認しました。死体からは太股が抉られていました。しかし、それ以外に目立つ外傷はありません。とはいえ私は医者ではないですから、その検分が正しいとも限りませんが。それでも私はＡさんが毒殺されたと判断しました。その根拠としてＡさんに自殺の意図がなかったからです。地霊殿にまで逃げ延びたＡさんの心を読んだ時に、それがはっきりと分かっています。自殺でな

いなら他殺か事故死、理解した私は犯人探しに乗り出しました。私は地霊殿に住まうものたちを一箇所に集めました。そして一人ずつに同じ質問をし、言葉ではなく、その心を聞いたのです。質問というのは『Aさんを殺しましたか？』と簡潔にです。心に嘘はつけません。私はこれで犯人が発覚すると考えました。……ですが一人の例外を除いて誰一人としてAさんを殺していませんでした。とすると外部の犯行になります。けれどこれは門番を務める妖精に否定されてしまいました。その妖精は、昨日から今日までの間、Aさんと妹、リグルさん、お燐、お空以外は誰一人として通していない。と答えました。それが事実ならば、外部犯がAさんを殺したのではありません。内部犯、つまり身内の凶行となります。しかも私の読心を掻い潜れるのです。そんな人物は一人しか思い至りません。私は妹に詰め寄り、問いかけたのです。『あなたが殺したの？』と、です。しかし、これを否定するものが居ました。リグルさんです。彼女は、夕餉の一部分以外は妹とずっと一緒に居ました。その証言は心持でも確認し、事実でした。誰もAさんを殺していないのに、誰かがAさんを殺したのです。不思議ですね。念のため、私は全員の行動を確認してみました。ほとんどの妖精は同じような行動ばかりだったので省きます。さて妹の証言からです『リグルと帰ってきてから、部屋で双六で遊んでたよ。でも途中でリグルが因縁をつけてきたの、それで喧嘩になって、しばらくしたらお姉ちゃんが私たちに晩御飯はなにがいいか、と聞いてきたから適当に答えたの。妖精が呼びに着たから晩御飯には降りたけど、皆が食べ終わる少し前に退席して部屋に戻ったの。それから一〇分ぐらいしてリグルが戻ってきて、そのときに仲直りしたわ。それから眠ったの』その次に問いただしたリグルさんの証言は妹と似たようなものです『こいしの部屋で双六で遊んでたけど、こいしが無意識に反則したから注意すると喧嘩になりました。ふて腐れてると、あなたが晩御飯のメニューを聞きにきました。こいしが答えてからしばらくすると、妖精が呼びに。晩御飯をご馳走になってから部屋に戻ろうとしたけど、部屋を間違えて迷ってしまい、昆虫に探してもらいました。部屋に戻ったら、なんだか喧嘩してたのがどうでもよくなって、仲直りしました』続いてお燐の証言ですね『お空と一緒に散歩してたら死んだばかりの人間を発見したんです。でも、お空が燃やしてしまって、仕方なく、燃え残った骨をあたいが、焦げた肉をお空が持ち帰ったんです。帰った時間は三時ごろです。しばらくは骨磨きに夢中だったけど、それにも飽きて、そしたら妖精が夕食を伝えにきました。夕食は刺身というので人骨を放り出して向かい、美味しく食べたのを覚えてます。七時ごろに刺身の残りがないかと台所に向かいました。そこでお空が冷蔵庫から刺身の残りを食べているのを見つけて、口論になって弾幕をはじめました。でも、その騒音でさとり様を起こしてしまって……、お空と一緒に鍵の空いている部屋を探して、三階の適当な部屋に身を隠しました。さとり様が去った後で、私たちは扉を閉めて、自分の部屋に帰ったんです』最後にお空の証言ですが『昨日はお燐と一緒に散歩してて……うにゅ？』残念ながら、お空は欠片ほどしか覚えていませんでした。結局、犯人探しは諦めて、Aさんの死体はもの欲しそうにしていたお燐にあげました。――あら、もうお帰りですか？　なんでしたらAさんが使っていた部屋に一泊してもかまいませんよ。痕跡はありませんが、何か、犯人を掴む糸口が見つかるかもしれません。夕餉はこちらで準備します。……ちょうど新鮮な鳥肉が手に入ることですしね。ふふ……」

（終）

〈作者コメント〉

※コメントなし

※今回は一応月刊ナイトバグ９月号に掲載されたマンガのつづきです

ツバキの花の美しさがわからないっていうの
風見幽香
紅葉のない常緑樹とか、プッ、最低ぇ
秋 静葉
……
それはさておき
触らぬ神に祟りなし
いきなり面倒くさがるな
私は通りがかったところをたまたま見ただけだから詳しくはないけど
二人で植物の話をしていたらあんな風になっちゃったみたい
幽香さんも大人気ない……
しょ、しょうもない
——とはいえ静葉さんもあまり戦いは得意ではないんでしょ？
あのままバイオレンスな展開になったらどうなる事か
う、それもそうね
とりあえず蜂か何かで驚かすなりして二人を引離して頂戴
命令されるおぼえはないんだけど

ブーーン
バシッ
ぼたっ

帰って寝るか
レティみたいに
……

蜂の一匹程度ではだめよ
蟲の大群よ、蟲弾幕！
ダーッ！
それは止めた
方がいいよ
今の時期蟲の大群
なんて呼んだら――

蠢符「ナイトバグストーム」
いいからヤル！
バグストームよ！
はいはい
蠢符

ぶぶわぁっわぁわぁっあっあ

蟲の大群が里の田畑をかぎつけたわよ
今年は凶作ね
だから止めたのに

お腹すいたなー
サクリティア
タイプじゃなかった
なんて失礼
ダブ南悪夢だし
今更鳥を恐れるとでも
思ったのなら
後悔させてあげるわ
番組の途中ですが
十六夜咲夜さんの
お料理教室です
まず鳥肉を用意します
私かー！
胸肉です
おっぱいか…

ぼこ

11月号テーマ

『パロディ』

『ハートキャッチリグキュア!』　ミナモ

初参加がこれとは…
プリキュアコスやってみたかったんです!
背景派手ですね。

『 バトスピなリグル 』　東

前回多かった遊戯王勢に対抗？してバトスピなリグルさんです。
まぁアニメを見てるだけで、実際バトスピはやってないですけどｗ自分はもっぱら三国志大戦勢です

リグル・スミス

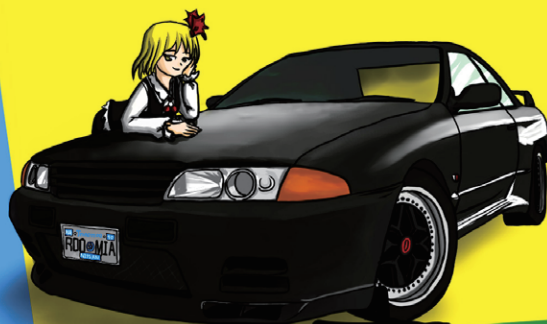
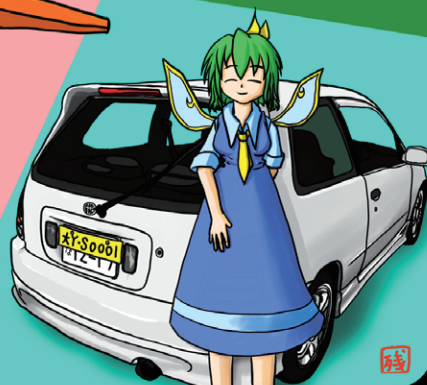
宵闇に溶ける第89の人格

多重人格アクションゲーム「killer7」風リグル。特殊能力を駆使して笑う顔《ヘヴンスマイル》を殺《ヤ》るのです！！

『 劇場版 』　キッカ

日本一有名なロボットアニメの劇場版第二作！

『 魔界鉄道999 』　蛍光流動

「次の停車駅は『凍てつく世界で』。停車時間は153.6時間。怪綺談線急行『Dream Express』は
お乗り換えです。」
「ちなみに、運行規則17条によりこの列車も片道運転です。よろしかったでしょうか？」

『イニシャルＷ』　残虐非道の貴公子

某ドリフト漫画とのパロディですがこれを描いてるときに友人に『出てこない車多すぎ』といわれましたが、しかし車は私の趣味。つまりまったく考えてなかった＾ｑ＾

『黒姫リグル』　ADDA

今宵は私のナイトメアで酔えばいい！

『 奇動戦士リグル ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ 』　怒羅悪

にとり「またアニメ作ったよ！」
リグル「これって後期になるとタイトルバック私じゃなくなるんじゃぁ・・・？」
にとり「えっ」　おとも「私は？」

※この漫画は見開き閲覧非推奨です

蛍の光は冷たい光？

×年の科学

こんなに蛍がいたら
いつ火事が起こっても
おかしくないじゃない
用心よ、用心
?
蛍の光は
熱くないよ
火元発見！
ざばっ
…というか、
こんな水辺で
火事も何も
ないでしょうに
「光」って熱い
ものでしょ!?
なによ
火も電気も
みんな熱い
じゃない
何してん
のよ
大丈夫？
何とか…
ちょっと
いい？
確かに
そうなんだ
けどさ……

そもそもみんなは
どんな光を知ってる？

太陽
かな
肉！
火！

白熱灯も
そうよね
炭火とか、
提灯とか？
祭

ここは
幻想郷だっ！
チェレンコフ光！
レーザー！

確かにその
どれにも
「熱」はある
さて、たくさん
上げてもらった
けれど

揚げ足を
とらない
どっちも
あるじゃない
例

じゃあ、
なんで「熱い」
んだろう？
？

どんな反応にも
元になる
「エネルギー」は
あるでしょう？
火にしても電気にしても
熱と光がこのエネルギーから
変化して発生したものなの
だから火も電気「熱い」のよ
こういう風に、
熱の発生と共に
出てくる光の事を
「白熱」と言うの
光
熱
光
光

ほらみなさい
だったらやっぱり
蛍だって…

熱く…
ぴ
とっ

熱くない
でしょう？

そう考えてみると
不思議だよね
何か頭痛くなって
きたわ
混乱するのも
無理は無いけど
理屈はそう
難しくないよ
さっきの説明で
言うエネルギー
が仮に10個ある
として…

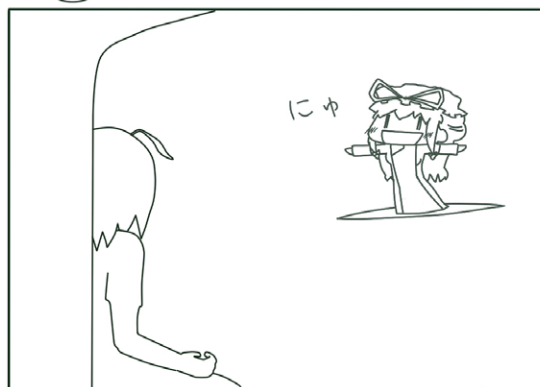
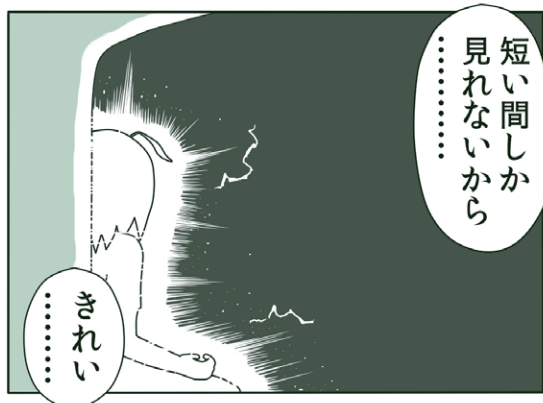
例えば白熱灯は
10のエネルギーの
内、1つ分しか光
にしていないの
光
熱
ええっ!?
若干効率の良い
蛍光灯ですら二つ分
残りは役に立たない
熱になってしまうわ
熱
白熱によって発生した光は
エネルギーの大部分を
「熱」として捨てて
しまっていたの！

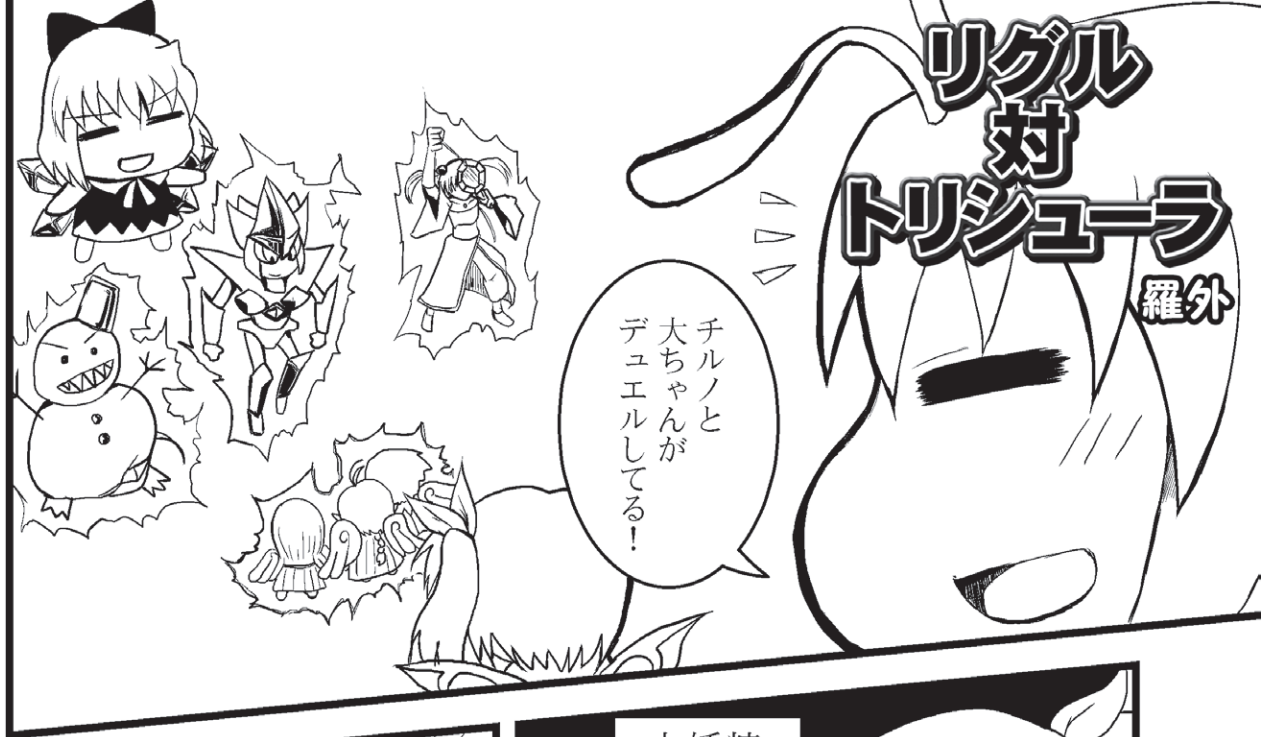
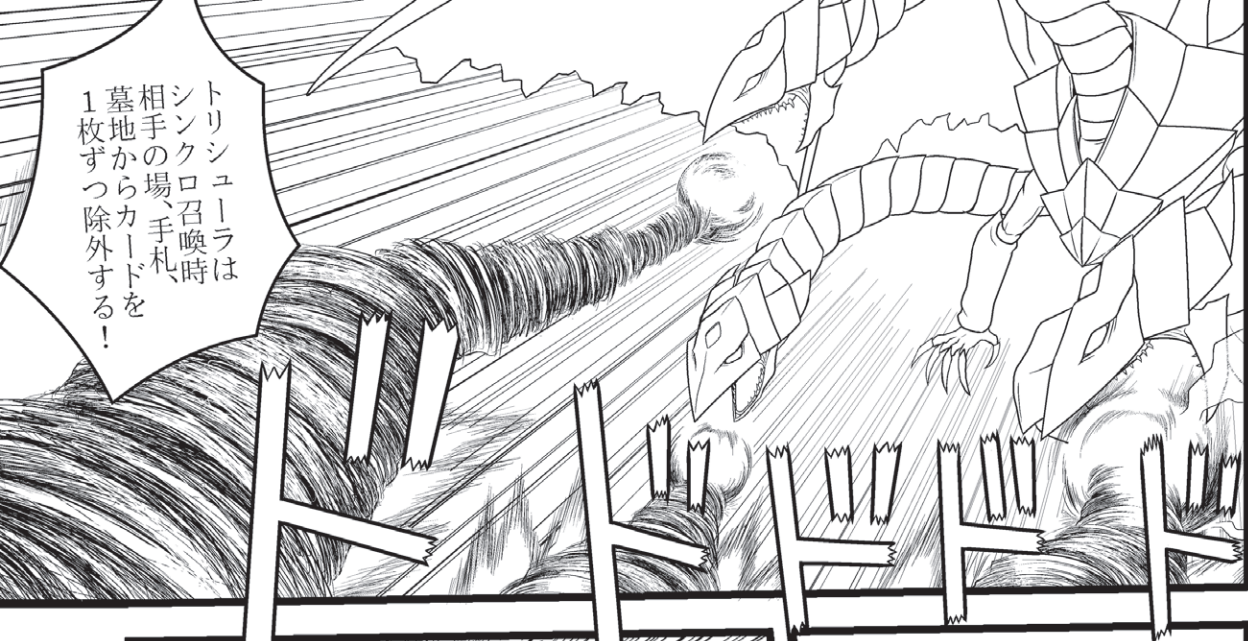
白熱灯は最も自然光に近いなど、
それぞれの良さがある

※この漫画には一部真実が
含まれている場合があります。

その幻視の夜をぶち殺す

ネバーセイ・ネバーアゲイン

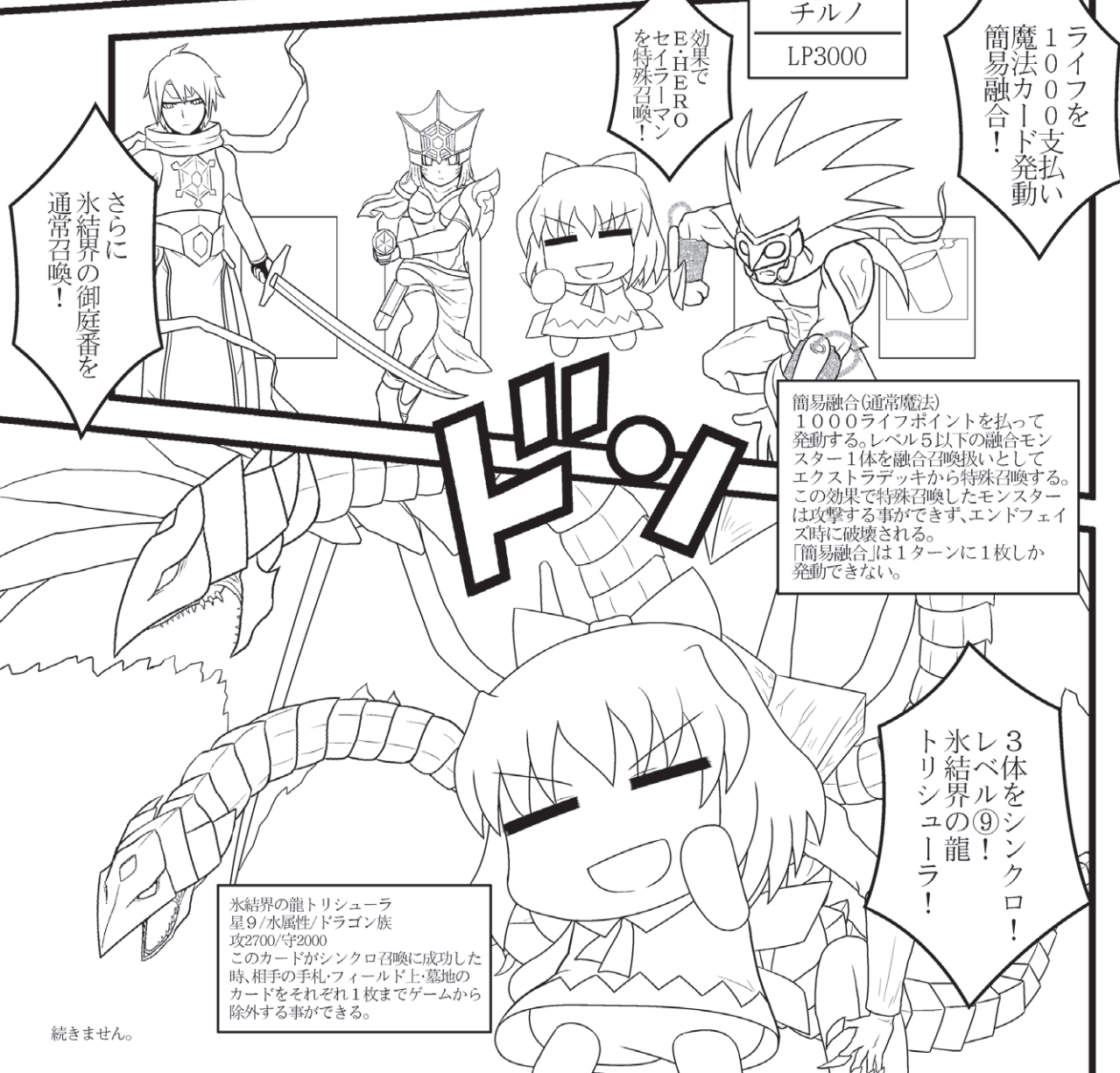
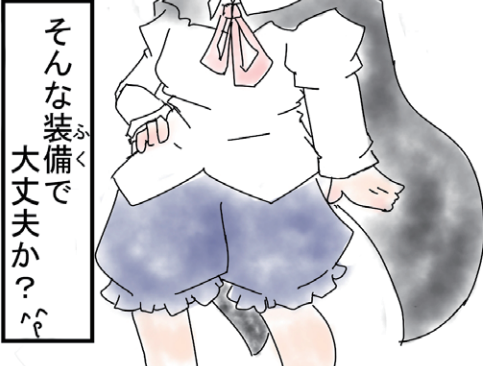
極楽大作戦!! GS(ガールズサイド)リグル

～前回までのあらすじ～
ちょっとやり過ぎたので巫女さんやメイドさんに懲らしめられました

描いた人:猫屋敷

このページは亜斗さんにペン入れしてもらいました

トリシューラはシンクロ召喚時相手の場、手札、墓地からカードを1枚ずつ除外する！
ドドドドドドド
さらにトリシューラでダイレクトアタック！
きゃぁぁあああああっ！
大妖精
LP0
うぅ…
ガッチャ楽しいデュエルだったぜ
ドさっ

大ちゃん！
お願いリグル
チルノちゃんに
デュエルの楽しさを
思い出させてあげて
トリシューラ…
あのカードを
手に入れてから
チルノちゃんは
変わってしまった
ふん
次はキサマが
相手をして
くれるのかな？
仕方ない！
デュエルで
目を覚まさせて
あげるよ！
決闘!!

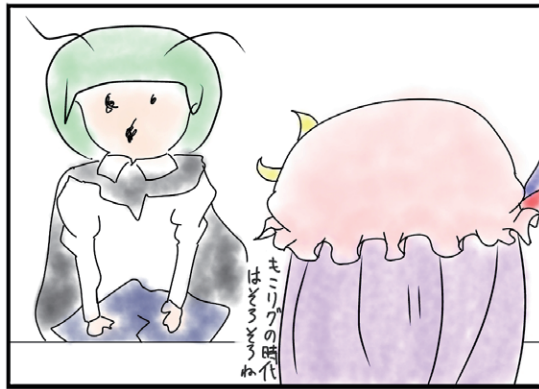
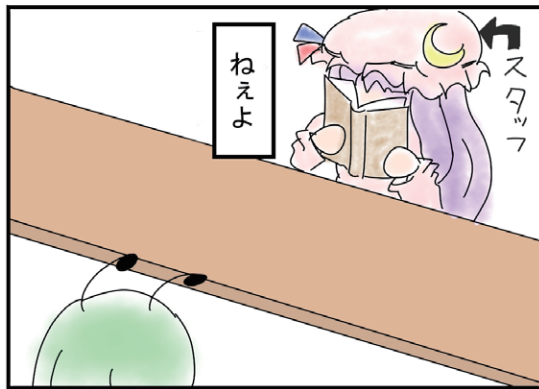
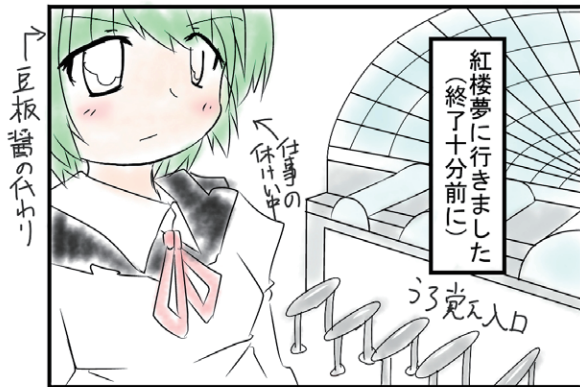
チルノ
LP4000
アタイのターンドロー!氷弾使いレイスを召喚!
氷弾使いレイス(チューナー)
星2/水属性/海竜族
攻 800/守 800
このカードはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。
カードを2枚セットしてターンエンド
ボクのターンドロー!手札から永続魔法発動大樹海!
大樹海(永続魔法)
フィールド上に表側表示で存在する昆虫族モンスターが破壊され墓地へ送られた時、そのモンスターのコントローラーは破壊されたモンスターと同じレベルの昆虫族モンスター1体をデッキから手札に加える事ができる。
リグル
LP4000
共鳴虫を召喚!共鳴虫のレベルは3だ!
共鳴虫
星3/地属性/昆虫族/攻1200/守1300
このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下の昆虫族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
その後デッキをシャッフルする。
共鳴虫で氷弾使いレイスに攻撃!

罠カード発動
グレイモヤ不発弾！
なんだって!?
グレイモヤ不発弾(永続罠)
フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター２体を選択して発動する。
選択したモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。
このカードが破壊された時、選択したモンスターを破壊する。
さらに亜空間物質転送装置！
レイスを除外する！
ズドム
レイスが場を離れたことによって不発弾が炸裂
共鳴虫　爆☆殺！
亜空間物質転送装置(通常罠)
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、発動ターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。
チルノが罠カードを使っただと…
大樹海の効果発動！
デッキからレベル３ナチュル・バタフライを手札に加える

カードを1枚セットしてターンエンド！
エンドフェイズレイスは場に戻ってくる！
そしてアタイのターン！
ライフを１０００支払い魔法カード発動簡易融合！
チルノ
LP3000
効果でE・HEROセイラーマンを特殊召喚！
さらに氷結界の御庭番を通常召喚！
簡易融合(通常魔法)
１０００ライフポイントを払って発動する。レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃する事ができず、エンドフェイズ時に破壊される。
「簡易融合」は１ターンに１枚しか発動できない。
ドン
3体をシンクロ！レベル⑨！氷結界の龍トリシューラ！
氷結界の龍トリシューラ
星９/水属性/ドラゴン族
攻2700/守2000
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ１枚までゲームから除外する事ができる。
続きません。

リグシャダイ
リーグッル・・・
（無理がある？）
↑傘持ってるから採用
そんな装備で大丈夫か？
大丈夫だ！問題ない！
キリッ
りぐるきゅんハァハァ・・・
男の娘・・・イイ・・・
リァハァ
急展開に驚いた？
そのズボンの中に何を隠してるの？
Wriggy Shaddai
三板醤

リグシャダイ2

結論:何着てもリグルは可愛い

全然関係ないけど紅楼夢

ガチで帰ろうとしましたが、何とか入れて残り時間まで楽しみましたw

リグルさんに男服着せるか悩んだ件

私立東方学園
学年、成績等
全てランダムに
選出された
生徒たち。
彼女らが
教師から与えられた
課題とは…？

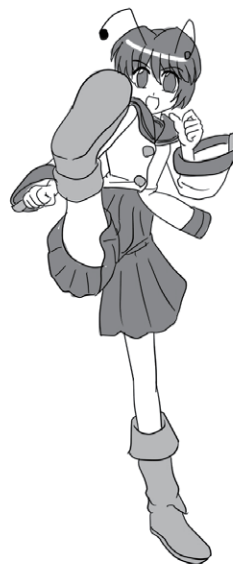
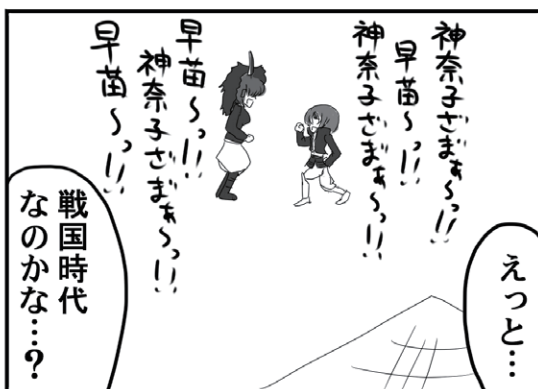
楽屋ウラ的なにか。

番外編

～10年前のシリーズ物
なんて誰もわからないよ
ver.～

描いた人
草加あおい

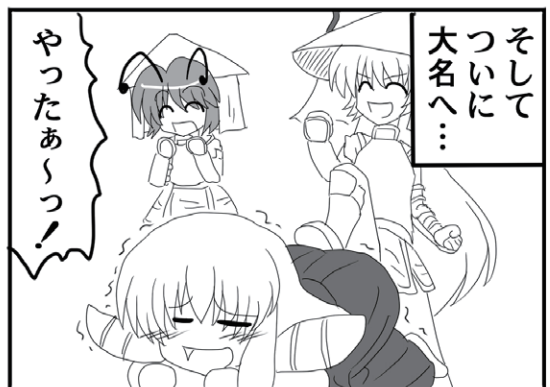
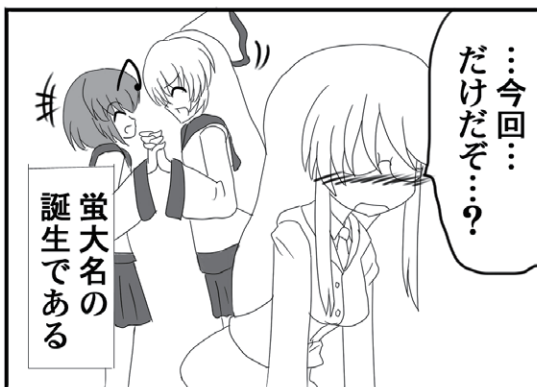
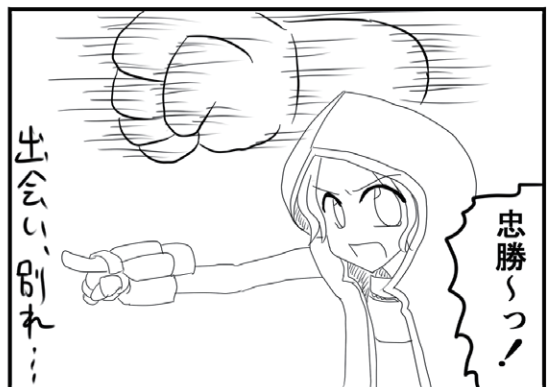
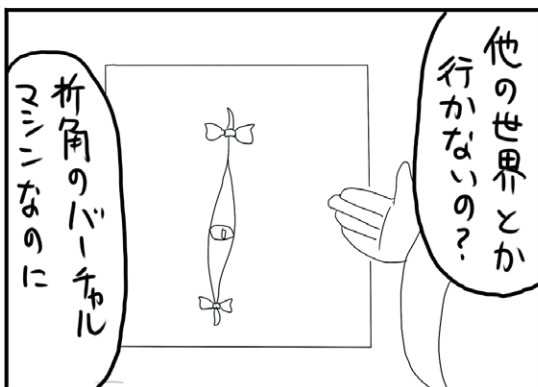
お館様は諏訪神社参拝してた

○二病ではないよ。

永久という文字で松永久秀が思い浮かぶ

蛍大名でググってはいけない

愛と勇気と希望の名の下にとかドラまたとか

楽屋ウラ的なにか番外編の楽屋ウラ的なにか

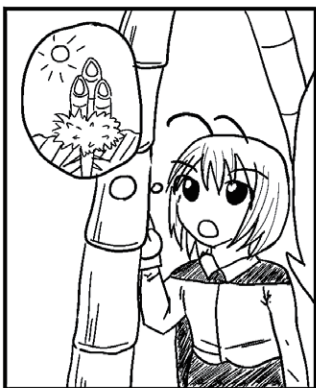
描いた人 草加あおい

東方茶話會
ハッピーバースデー リグルーッ!!
サプライズ!?
あと、よく聴いたらハッピーバースデーの歌じゃないねっ!
毎月毎月駆除されてるリグル…
今日の私は害虫だって幸福にしちゃうよ…
じーん…
てゐちゃんありがとう…
てめぶっとばすよまじで
いくよー
あー やっぱそれか!…
楽しいって矢印出てるしそのポーズももうバッチリだ
楽しい
9月号のアレじゃん 許可もとってないじゃん
あとすごくホウ酸の気配するけど…
まぁ今日はいいか 私ホタルだし ホウ酸団子効くのはゴキブリだし
リグル コンティニューまで あと5秒
♪ハッピバースデートゥーユー
くそぅ!だれだ!巣にでかい注射器で激しく水を流し込んだのはっ!
ん?
←たまご
クロック

愛されリグルコレクション

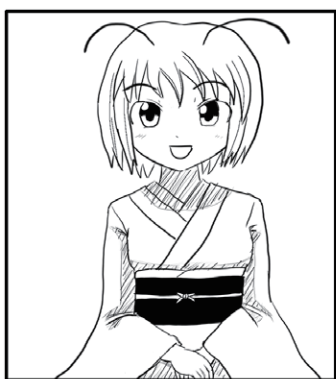
これまで数々の愛らしい姿を見せてくれたリグルからベストセレクションをチョイス！君の好きなリグルはいるかな？

●門松を探すリグル

お正月飾りとして必需品の門松を探しに竹林に来たリグル。でもそんなところに門松は自生していないぞ！

・果たして何処に門松が生えているんだろう？リグルに教えてあげよう！▼

●和服でおすましリグル

意外（？）にも和服が似合うリグル。彼女が和服を着ることで美しさが数倍に跳ね上がる！とっても素敵！

・彼女の慎ましさの前では小野塚小町も西行寺幽々子もかすむ！▼

●力説するリグル

自分の主張を力説するリグル。強いリーダーシップを持って会議を取り仕切る姿はとても凛々しくて頼もしい！

・強いリーダーシップを持った彼女をチルノ、ミスティア、ルーミアは慕っているぞ！▼

◆お知らせ◆今月の「リグル紅魔を行く」は作者取材のためお休みします。

描いた人：preludenano

※おことわり
今回の「テガミバグ～東方郵便娘」はテーマ特集「パロディ」に合わせた番外編になっております。パロディ元の都合上、一部キャラが崩壊していたり感じ悪くなっていたりします。
また、パロディ元である漫画「テガミバチ」の設定がかなり入っています（東方郵便娘の設定はあんまりないです）。特に漫画設定をいじって幻想郷に合わせた部分もあるかと思いますのでご注意下さい。
以上を踏まえた上で、苦笑いで済ませられる方はどうぞ、この下段よりお楽しみ下さいませ。

テガミバグ～東方郵便娘～

著者：SaIka

「こんにちは、アリスさん！　郵便です！」
深い森の奥にひっそりと佇む一軒の家。そのドアを開き、目的の人の名前を呼ぶ。
ガタガタというミシンの音が少し続いた後、その音が止み、中から声がした。
「いらないわ、帰ってちょうだい！」

＊

リグル・ナイトバグは幻想郷で郵便サービスを行っている。人里にある郵便館を拠点に、相棒の氷の妖精チルノを連れて危険な場所へでも配達に向かうのが彼女の仕事だ。
話はひとまず少し前まで遡り、前の配達を終えたリグルが帰館したところになる。そこには見慣れない人物の姿があった。八雲紫と名乗ったその人物はなんでも中央の役人だという、これまでの配達の仕事を散々非難した挙句、リグルと、その上司であり副館長であった慧音を左遷してしまった。
左遷された先は、「凍結物件」課。紫曰く「どうにもならない『テガミ』が腐るほどあるどうにもならない部署よ」だそうだ。
早速慧音より配達を命じられたリグルは、棚から一通の「テガミ」――ではない、塊となった「テガミ」の束である――を受け取っ

た。「魔法の森のアリス・マーガトロイド宛二百四十通」の「テガミ」を、リグルはすぐに配達に向かった。
　この「テガミ」は二年前から届いており、差出人は不明、配達のたびに受け取りを拒否され、溜まりに溜まった二百四十通が「凍結物件」課に眠っていたのだ。

＊

　そして、案の定リグルがアリスを訪れた時も、先の反応である。この「テガミ」について何も確認しなくていいのか、そう思いリグルは一応訊ね返す。
「差出人を知っているんですか？」
「知らないわそんなもの、持って帰りなさい！」
　カチンときたリグルは、負けじと更に言い返す。
「読みもしないでそんなものとはどういうことですか！　大切なことが書かれてるかも知れないでしょう！」
「ない！　帰りなさい！」
「受け取って下さい！」
「とらないわ！」
「どうぞ！」
「いらない！」
「サインはここ！」
「しない！」
　相手も相手で「帰れ」の一点張りである。そして遂に「いらない、帰って！」の一言と共にリグルはドアの外に突き飛ばされてしまった。
　リグルを拒絶するかのように、再び始まるミシンの音。紫の鼻を明かすためにもここで退くわけにはいかないリグルは、そこにしゃがんで待っていた。
　暫くしてミシンの音が止むと、今度は美味しそうな匂いがリグルの鼻に届く。大急ぎで来たリグルはろくに腹を満たさずに来たため、その匂いに釣られてお腹を鳴らしてしまった。
　その背後から、相棒チルノの声がする。
「リグル、このにんぎょう、いきなりわらったりおじぎしたりしておもしろいぞ！」
　振り返ってみれば、家の回りに幾つか置かれていた人形とチルノが戯れていた。
「この人形、アリスさんが作ってるのね。……あれ？　でもこっちの人形は無表情だけど……」
　顔色一つ変えない（人形なら普通それが当たり前だが）人形を前にリグルが首を傾げる。するとそこに、ドアが開く音と先ほどの美味しそうな匂いが同時に飛び込んだ。リグルが振り返る……エプロン姿のアリスが鍋を抱えてそこに立っていた。
「その子たちはしばらく遊んであげると心を開くのよ。ただ見るだけじゃその人形の良さは分からないわ」
　言ってアリスは、リグルの前に鍋を置く。立ち込める湯気の向こうには、匂いの正体——真っ白なシチューがあった。
「お腹の音が気がかりで集中できないわ。食べなさい。そして食べたら帰ること」
　言うだけ言ってアリスは、くるりと踵を返す。シチューをよそっていたリグルは慌ててアリスを呼び止めた。
「アリスさん！　待って下さい。この『テガミ』、二年前から届き続けているんです！　今もずっと……これじゃ差出人がかわいそうです！」
　アリスは足を止めた。
「だったら送らなければいいのよ。私は金持ちの道楽に付き合うつもりはないわ」
「その口ぶり！　やっぱり差出人を知っているんじゃないですか？　何故読んであげないんです！　読まなきゃ何も分からないじゃないですか！」
　押せる。リグルはそう確信したのか、ばっとチルノと戯れていた人形を指差した。
「あの人形の良さなんてちっともわかりません！　無表情で冷たくて動かないし、捨てられているみたいで……でも」
　リグルの表情が、更に険しくなる。
「しばらく一緒にいたら、わかるんですよね！」

そう言うなり、リグルは人形を抱えて座り込む。いつの間にか頑固だったアリスの表情は、呆れながらも優しいそれに変わっていた。

「最後に来た配達人は話を聞くどころか目も合わせようとしなかったけれど……面白いわ、食べなさい」

強気な目に変わったアリスは、リグルのよそいかけの皿にシチューを大盛りに注いだ。

「あなた、名前は?」

「り、リグル・ナイトバグです……。それと、あの子は相棒のチルノ」

チルノは人形を抱えて眠りこけていた。

＊

「あの『テガミ』を、私は読んではいけないのよ」

食器を片付けてきたアリスは戻ってくると人形を抱えて、おもむろに話し始めた。

「五年前、私には好きになった人がいたの。パチュリーという、物静かで読書好きな魔法使いよ」

そう言ってアリスはチルノが抱えている人形を指す。「この子よ」と付け加えてくれた……どうやらこの人形のモデルがパチュリーらしい。綺麗な薄紫陽花の色の髪をしていた。

「パチュリーも私に心を開いて好きになってくれたけれど、親が希望した縁談で、金持ちのお嬢様の元へ行ってしまったの。家を飛び出した駆け出しの人形職人の私にはどうしようもなくて……。貧乏な家出娘と血統書つきの立派な魔女……最初からつりあうわけがなかったのよ」

「でも、パチュリーさんもアリスさんのことが好きだったんでしょ?」

「喘息持ちのパチュリーのこと、両親も心配だったんでしょう。あの人が従ったのは家のため、両親のため……。こんな瘴気だらけの森の奥の貧しい暮らしではね」

最後にありったけの自嘲を込めてアリスは言い切った。自分が裕福だったなら、そんな無念が言葉から滲んでいる。アリスは一度パチュリーの人形を撫で、続けた。

「だけど二年前、突然『テガミ』が届きだしたわ。中には一言『会いたい』と……」

好きあっていたというのなら、分からなくもない内容だ。

「開封したのは最初の一通だけだったわ。あの人はもう他人の妻なのだから……」

無念さとプライドがぶつかり合い、波を立てる。その「こころ」がリグルにひしひしと伝わり、リグルは「こころ」がじくじくと痛んだ。愛し合っていながら互いの境遇ゆえに引き離された二人に同情してしまう。

「リグルと言ったわね。……湖の向こうにある紅い館、スカーレット家へ行ってくれないかしら。差出人はその夫人よ。会って……『テガミ』はもういらないと、伝えてちょうだい」

アリスの眼に、既に先ほどまでの沈痛さはなかった。代わりに全てを覆い隠すような強い眼差しがあった。

「それが叶えば、その『テガミ』は私が受け取って墓まで持っていくわ」

「ちゃんと受け取ってくれるんですね?」

リグルは念を押して確認する。アリスはそんなリグルの手を取り、

「ええ、女同士の約束よ」

そう言って強くその手を握った。繊細で綺麗な指をしていた。

「あ、人形が笑った!」

リグルの手に抱えていた魔法使いの人形がにっこりと笑うのを見て、リグルも思わず微笑む。

「気に入ったかしら? そうそう、パチュリーを辛い境遇に追い込むことだけは避けたいの。くれぐれも当主のレミリア・スカーレットにだけは内密にね」

アリスは最後にそう、付け加えた。

リグルはそんな一連の流れに煮え切らない気持ちを抱えながら森を発った。リグルはまだ幼いため愛や結婚という話にはてんで疎い。だが、会えない辛さというものは知っている。それだけに、会えない人の「こころ」を繋ぐ自分の仕事が役に立たないことがもど

かしくてたまらないのだ。

＊

　すぐに紅い館は見つかった。予想以上の大きさにリグルもしばらくはぽかんと口を開けていた。

「出せ！」

　門の奥から幼い声と、馬のいななきが聞こえる。鉄格子の門が開かれ、馬車が姿を現した。だが、その進行方向には……一人の妖精。

「危ない！」

　咄嗟にリグルが動き、妖精を抱えて道の脇に飛び込む。馬が驚いて急に止まり、馬車が揺れた。

「揺らさないでよ、馬鹿！　あんたはクビよ！」

　中から先ほどと同じ幼い声が聞こえる。馬車の窓から見えた声の主は、隣に派手な女をはべらせている吸血鬼だった。

「ごっ、ご勘弁をレミリア様！　今、人が……！」

　怯える運転手の声。小さく見える背中が、幼い足に蹴られる。

「いいから早く出しなさい！」

「ひぃ！」

　慌てるようにして運転手は手綱を引いて馬車を発進させた。リグルはあまりの暴虐ぶりに唖然としながらも、助けた妖精を起こす。

　通りがかっていた別の妖精が、後ろから悪態をついた。

「酷いものね、遣りたい放題だわ」

「今のがレミリア・スカーレットさんですか？」

「ええ。愛人をはべらせて今日も阿片窟でパーティよ。夫人が可哀想ね……大人しい人で全く外に出てこないけれど」

　夫人……パチュリーのことだ。リグルははっとする。こんな女のそばに居て平気だとは思えない。

「亡くなった先代は立派な方だったのに……」

　尚も文句を垂れる妖精。そこへ後ろから鋭い声が飛んできた。

「お屋敷の前で何をしているのです！」

　立派な赤髪に、惜しげもなく美脚を晒す女性。どうやら守衛のようだ。

「スカーレット家の守衛はガラが悪いのよ、あなたも気をつけて」

　妖精はそうリグルに耳打ちすると、そそくさと去っていった。

＊

　屋敷の裏手、リグルはそこからの侵入を試みることにした。まるでこそ泥のような行動に、傍らのチルノが首を傾げる。

「もんからはいらないのか」

「うん。もしかしたら、パチュリーさんはこの家で辛い思いをしていて、「テガミ」で助けを求めているかもしれない。だったら家の人に見つからないようにパチュリーさんの心を聞き出して、アリスさんに伝えるしかないよ。私が「テガミ」となッ……てぇ！？」

　言葉の途中で、チルノはリグルの襟首をつかんで飛び出した。窓がない館の入り口は、通気孔か煙突くらいだ。チルノは近くの通気孔に向かって、思い切りリグルを投げつけた。通気孔のまわりの壁が、勢いで崩れる。

「いだだ……」

　頭から落下したリグルはたんこぶを押さえる。後からチルノがふわりと入ってきた。

　痛みが引いたところで辺りを見回す……割れたビンの破片や紙切れ、骨董品のツボや絵など、様々なものが散らかり廊下は荒れていた。

「これはひどい……いったいここで何があったの？　もしかしてパチュリーさんの身に何か……」

　嫌な予感がリグルの脳裏を過る。さらにアリスに届いていた「テガミ」と同じ封筒まで落ちていた。テガミはパチュリーが出したの

で間違いない。
　と、そこへ。
「やめて……」
「ここまでです、パチュリー様、お覚悟を！」
「嫌あァアッ！」
　悲鳴。そして「パチュリー様」と呼ぶ若い男の声。リグルはすぐに飛び出した。悲鳴が聞こえた部屋へ一直線に走り、扉を開ける――
―
「私は『ロイヤル・ストレート・フラッシュ・ゴードン』です、パチュリー様！」
「嫌ァー、また負けたぁー！」
「さぁさぁ食べて下さい、パチュリー様！」
「これ以上食べたらあんた達まで虫歯になっちゃうわよー？」
「こ、光栄です、パチュリー様……」
　扉の向こうで待っていたのは、散々菓子屑が散らかった部屋で、だらしない格好で男とトランプ・ゲームに耽る、金髪を右サイドで結い、紅い眼、そして七色の宝石の羽を生やした少女だった。傍らには男性が二人。そのうちの一人が、少女に皿に山盛りのチョコレートを差し出している。少女は人形で見たパチュリーの姿とは大違いだ。見知らぬ赤帽子の少女に気付いたパチュリー（？）が、はたと顔を向ける。
「ん？　あんた誰？」
「わたしは　ゆうびんやの　リグルです　あなたは　だれ……」
　とてもパチュリーとは思えないその姿に、リグルは呆然としながらも問い掛ける。
「パチュリー・ノーレッジだけど？」
　パチュリー（？）は毅然として答えた。瞬間、リグルの中であの人形の姿が音を立てて砕け散る。リグルは目の前が真っ暗になった。
「何こいつ、普通に信じちゃったの？」
　反応をしないリグルを見て信じ込んだのだと思ったパチュリー（？）は、隣にいた男から薄紫陽花色のウィッグをもらい、頭にかける。なんとも不釣合いな姿が出来上がった。
「まったく、お楽しみの最中だってのに……三百歳も年下の病弱女に成りすますのは大変なのよ？」
「ニセモノ……じゃあ、本物のパチュリーさんは……。『テガミ』は誰が……」
　パチュリーを名乗る偽者の登場に、リグルは混乱と焦りを覚えた。一体どうしてこの謎の少女がパチュリーを名乗っているのか、本物は何処にいるのか、そしてここにパチュリーが居ないとしたら「テガミ」は誰がどこから出しているのか……得体の知れない不安はますます大きくなっていく。
「妖精ども！　虫けらが入ってきたわよ！」
　偽パチュリーの声を合図に、廊下から無数の足音がリグルの耳に届く。はっとしたリグルが顔を上げると、大勢の武装した妖精メイドによって囲まれていた。
「私はパチュリー・ノーレッジ。百歳だったかしら？　それで私の『テガミ』がどうしたって？」
　その一群の中心で、勝ち誇った笑みを浮かべながら少女がリグルににじり寄る。リグルを護らんと、相棒のチルノがリグルを庇うように仁王立ちになる。
　自ら成りすましていることを明かしながらも、少女は頑固にパチュリーを名乗り続けた。リグルには全くわけがわからない。
「違う、あなたはパチュリーさんじゃない！　だって、大人しくないし、似てませーん！」
「いいえ、パチュリーよ？」
「違います！　どうしてパチュリーさんに成りすましているんですか！」
　偽パチュリーはそれには答えなかった。代わりにリグルの顔をまじまじと見つめ、
「よく見ると可愛い妖怪じゃない。この館で見たこと全部忘れて、『テガミ』のこと話してくれたら、た～っぷり、もてなして……」
　距離が、詰まる。少女が浮いた。
「あげるわよ～！」
「きゃ！」
　偽パチュリーが飛びかかる。リグルは咄嗟に腕で身を覆ったが、防ぎきれない。だがリグルに攻撃が届くより速く、氷の刃が少女を襲った。
　相棒チルノの得意な氷の攻撃だ。リグルと出会った頃はバリエーションに乏しかった氷の造形も、冬の妖怪レティとの出会いを経て、その技に更に磨きが掛かっている。これにはリグルも驚いていた。

刃は器用に偽パチュリーの服だけを切り刻んだ。生身を傷つけることは、リグルが許さない。出会ったその日、リグルは、人を傷つけようとするチルノに「人はいけませーん！」と教えた。リグルを信頼するチルノは今でもそれを守っている。
「いやぁ～ん！」
　偽パチュリーが裸を隠している隙に、リグルはチルノを抱えて飛び出した。妖精メイド達はというと、偽パチュリーの裸とくまさんパンツに鼻血を流しながら悶えていた。そこに偽パチュリーからの喝が飛ぶ。
「あんた達！　私の裸に見惚れてる場合じゃないでしょ！　逃がしちゃだめよ……とっ捕まえるの！」
　再び妖精メイドが武器を構えて追いかける。しかし、またもチルノの氷の刃が襲い掛かりそれを阻んだ。得物は完全に切断され、勢いで飛ばされた者同士がぶつかり合い次々と床に倒れ伏す。その光景に唖然とする偽パチュリーの眼前に、チルノはずいと詰め寄った。
「おまえ、そのはねかっこいいな」
「言ってる場合じゃなーい！　チルノ後ろ！」
　石像の影からリグルがツッコむ。チルノの後方から、撃ちもらした妖精メイドが銃を構えてチルノを狙う。
　ガキィン！
「たて！？」
　即座に反応したチルノは、自分を覆う巨大な氷の盾を作り出して銃弾を防いでいた。これには妖精メイドもリグルも目を丸くする。
　だが、妖精メイドは次から次へとやってきた。圧倒的な数の不利を感じ、リグルは逃走体勢に入る。
「まずいよチルノ、多すぎるよ……逃げよう！」
「逃がすな！　外でベラベラ喋られたらおしまいよ！　ぶち壊しなさい！」
　偽パチュリーも必死で、怒号を飛ばし妖精メイド達を奮い立たせる。
「なんて子なの……パチュリーさんは無事なのかな……」
　細かい事情は分からないが、ただ事ではないことは分かる。こんな物騒な家で、パチュリーが無事だとは思えない。
　そんな心配をするリグルを嘲笑うかのように、前方からも足音が聞こえた。挟まれた、まずい……リグルは息を飲み、チルノは冷気を構える。
　と、そこへ。
「こっちです！　郵便屋さん！　早くこの部屋へ！」
　ドアの隙間から僅かに手招きと声が。リグル達は地獄に仏だと、すぐさまその部屋へ飛び込む。
　リグルとチルノは暫く僅かな隙間を開けて廊下の様子を覗っていたが、妖精メイドたちが「いないわ！　南側を調べて！」と言いながら見当違いの方向へ散り散りになって居なくなるのを確認すると、ほっと胸を撫で下ろした。そしてくるりと向き直り、この部屋へ導いた先ほどの声の主のほうを見る。
　部屋が暗く、僅かな影が長い髪の輪郭を描いている位しか人物像が分からない。とりあえず信用して良さそうだと、リグルは頭を下げた。
「助かりました。ありがとうございます……！」
「いえ……」
　返って来た声は、妙に落ち着いている。もしや、とリグルは思う。
「もしかして、あなたがパチュリーさん……」
　呟きと同時に、ボッ、と小さなマッチの点火音がして、ぼんやりとした火にその姿が映し出される。光と影でおどろおどろしくも見えたが、それ以上にリグルは頭と背中に生えている羽に驚かされた。
「……ではないみたい～っ！」
　期待していただけにがっかりも大きい。思わず大声で落胆の意を表現してしまった。慌てて羽の女が「しーっ！」と人差し指を口に当てて制する。
「私はパチュリー様の側仕え、小悪魔です」
「ごめんなさい小悪魔さん……私は郵便屋のリグル・ナイトバグです。あのっ……」
　パチュリーの安否以上に、気になることを

先に訊ねる。
「あの（怖い）女の子は……一体誰なんですか？」
　パチュリーに成りすます謎の少女。館の関係者だとは思われるが、一体何者なのか。
「あの方はフランドール様……レミリア様の妹様です」
「レミリアさんの妹さん!?」
　ますますリグルはわけがわからなくなる。姉妹がぱっと見では似ていないことで全く想像がつかなかった上に、妹が嫁のふりをするという理由が思いつかない。最早それを知る鍵は一つ。
「あ、あの……小悪魔さん！本物のパチュリーさんはどこですか!?　会わせて下さいっ！　『テガミ』のことで話があるんです！」
　それを聞きながら、小悪魔は返事をせずに小さな机へと向かった。リグルは興奮を抑えきれないまま彼女について行く。
「私……パチュリーさんに伝えなきゃいけないことが……」
　小悪魔は机の上の箱を開け、一通の封書を取り出す。
「この『テガミ』のことですか……？」
　取り出された封書の封筒は、アリスに届いていた『テガミ』のそれと全く同じものであった。
「パチュリーさんの『テガミ』……!?　そ、そうです……！　そのことで……」
「パチュリー様と」
　リグルの言葉を遮り、小悪魔は続ける。
「お話することはできません。丁度よかったわ、小さな郵便屋さん。これをアリス・マーガトロイドさんに届けて下さいな。残りは、これだけですから……」
　そう言って、小悪魔は取り出した封書をリグルに手渡した。丁寧な字で「アリス・マーガトロイド様」と宛名書きがしてあった。

＊

　ミシンの音は続く。アリスはリグルの帰りを待ちながら、黙々と人形の服を仕立てていた。
　と、そこに扉が開く音と、ふたつ分の小さな足音が聞こえる。リグルだとすぐに気付いたアリスは、ミシンを止めて振り返った。リグルは無言でアリスに近付いてくる。
「パチュリーに、伝えてくれたかしら？」
　リグルの返事は、言葉ではなく一通の封書――小悪魔がリグルに託した、パチュリーの最後の「テガミ」――だった。
「『テガミ』ですって!?　どういうことよリグル……もう出さないでって言ったはずでしょう？」
　まだリグルは答えない。
「約束、破ったわね。要らないわ、持って帰ってちょうだい」
　それでもリグルは答えない。黙々と、「テガミ」の束を床に置いて、銃を構える。
　この銃は特別なもので、込める弾は持ち主の「こころ」、それを、特別な力を持つ蟲が閉じ込められた「琥珀」によって増幅させ引き出し、それを弾丸として打ち出すのだ。
「わたしの『心弾』は、ものの『こころ』が見えるんです……」
　更にリグルの弾丸には、当てた「もの」の「こころ」――つまり記憶を見せる力を持つ。リグルの狙いは、この「テガミ」に込められたパチュリーの「こころ」、「会いたい」の言葉の向こうにあった「テガミ」の記憶をアリスに見せることだったのだ。
「アリスさん……見て下さい！　パチュリーさんの『こころ』を！」
　銃に埋められた「琥珀」がリグルの「こころ」に反応し、弾丸を作り出す。それは殺傷能力のない光の弾となって「テガミ」に当たった。眩い光が弾け……。
　まるでフィルムのように、そこにスクリーンがあるかのように、映像が映し出された。
　そこには……。

＊

「さぁ、早くだして」
　映像がだんだん鮮明になる。レミリアが愛人をはべらせて阿片窟へと馬車を向かわせる場面が見えてきた。
「奥様はよろしいの？　新婚なのに悪い人」
　愛人の一人が猫なで声でわざとらしく問う。レミリアは鼻でふんと笑い、
「結婚は親同士のしがらみだけよ。でなければあんな貧相で退屈な女、誰がもらうものですか」
　その傲慢な女を見て、アリスは眼光を尖らせて「こいつが、レミリア・スカーレット……」と呟いた。
　映像はまだ続く。中でレミリア達がいやらしく絡み合う馬車が遠ざかり、館が映し出された。入り口に立ち見送る一人の女性。彼女は紛れもない、パチュリーだった。
「パチュリー……」
　悲しげな目をした少女の名を、アリスが呼ぶ。
　突然映像は切り替わり、そこにはフランドールとパチュリーが映された。割れた壺をパチュリーが片付ける傍らで、フランドールが偉そうに立っている。本来体が弱く喘息持ちのパチュリーがこのような雑用仕事をするなどもっての他なのに、フランドールは手伝うどころかこき使っている。
「もーほんっとカンにさわる！　この女どれだけトロいのよ！」
「すみません、妹様……」
　それでもパチュリーは申し訳無さそうに謝った。だがフランドールは「べー！」と舌を出し、
「ふん、あんたなんかに妹だなんて呼ばれたくないわよ」
　と毒づいた。
　更に場面は切り替わる。暗い部屋、外から聞こえる馬の蹄の音と女たちのはしゃぐ声。部屋のベッドに佇むパチュリーはそれには耳を傾けず、小悪魔の世話を受けていた。
「パチュリー様、身体の具合はどうです？」
「大丈夫よ。有難う小悪魔」
　か細い微笑みだった。
「お着替え、ここに置いておきますね。あら……」
　ベッドの脇に着替えを置いた小悪魔が、その横の机に置かれた箱に目を遣る。箱には大量の「テガミ」が入っていた。そう、アリスに届き続けたあの「テガミ」だ。
「『テガミ』ですか？　こんなに沢山……私が明日郵便館まで持って行きますよ」
「いいの」
　短くきっぱりと、パチュリーは断った。
「え？」
「これはいいの。書いて封をするだけの、出さない『テガミ』だから……」
　遠くを見るような目で、誰に言っているのか、パチュリーが言う。それは自分に言い聞かせているようにも見えた。
　「テガミ」からぼんやりと浮かぶ、愛しい人との思い出。人形を抱き、本を読み、魔法を磨き、二人笑っていた日々。
　――アリス、あなたの人形、あなたに似て無愛想なところもあったけれど……でも、「こころ」はやさしくて、温かかった……。
　ここも、いつかそうなると信じて……――
『スカーレット家に嫁げば、身体の弱いお前でも一生安泰だ』
『パチュリーのことを思って決めてきた話なんだよ……』
『お願いだ、年老いていく私達を安心させてくれないか……』
　パチュリーの脳裏に浮かんでくる両親の言葉。ここまで辛い日々を耐えてきたのは、両親を思ってこそ……。
　会いたい、会いたい、会いたい……。
　その「テガミ」の全てから、浮かんでくる言葉。
「どの『テガミ』も『会いたい』とだけ……」
　ひらりと舞う「テガミ」を手に取り、アリスがぽつんと呟く。大事な芯が抜けたような、どこか空っぽのような表情をしていた。
「でも、それは絶対に口にしてはいけない

言葉だから……だから、『テガミ』に書いた……」
　涙ぐみながらリグルが言葉を紡ぐ。幼い彼女の素直な「こころ」は、切ない思いを言葉にして結んだ。
「わたしにはわからない……！　好きなのに別れて、でもずっと好きで……」
　涙の雫がぽろり、頬を伝って落ちた。
「書いても出せなくて、届いても伝わらなくて！　大人になったらわたしにもわかりますか!?」
「リグル……」
　と、その時。
　光が割れ、別の映像が浮かび出した。ヴィジョンが現れるより早く、衝撃的な言葉が聞こえる。
「は、破産!?」
「ど、どういうことよ！」
　浮かび上がった映像には、五人の女性が映っていた。手前で、銀髪のスマートな女性——恐らく会計士だろう——に詰め寄る吸血鬼の姉妹。その奥に、おろおろしているパチュリーと小悪魔。
「どうにもこうにも金の使いすぎです……先代が亡くなってから事業も借金まみれですのに……」
「あほか！」
　女性の襟首に、背を伸ばしたフランドールがつかみかかる。
「それを何とかするのが会計士の仕事じゃないの、咲夜!?」
「そうよ、私の遊び金！」
　更に勢いづいてレミリアも飛びかかる。二人して物凄い剣幕で怒鳴りつけるため、慌ててパチュリーが駆け寄った。
「二人とも、落ち着いて話を……」
「うるさい！」
　まるで邪魔な玩具でも突き飛ばすかのように……とてもそれは妻に対してとは思えないほど存在をないがしろに……それが当然かのように、レミリアは力任せにパチュリーを突き飛ばした。
　不幸なことに、そこは階段の際……。
　ふわりと浮いたパチュリーの身体。重力に従って落ちていき、階段の中腹から転がり落ち、踊り場で倒れぐったりと動かない。
「パチュリー様！」
　血相を変えた小悪魔がすぐに駆け寄った。
「レミリア様、医者を……！」
　小悪魔は息の細いパチュリーを抱き起こし、悲鳴に近い声で、レミリアに医者を嘆願する。だが、レミリアは冷酷だった。
「う、うるさい！　小娘が一人どうなろうと知ったことじゃないわよ！」
「いや……まずいですわ」
　横から口を挟んだのは会計士だった。だが。
「今はパチュリー様の実家からの融資で何とかやっていってる状態なんです。それが途絶えたとあっては僅かな収入も途絶えてしまいます」
　会計士もまた、パチュリーの命よりも金のことだった。小悪魔を除いて誰一人、パチュリーの人命の心配などしない。姉妹は金ヅルが、と騒ぎたて、その横で会計士は医者を呼びながら算盤を叩いている。
　場面はまた切り替わった。再び暗い部屋が映る。包帯を巻いた痛々しいパチュリーと、懸命に世話をする小悪魔。
「小悪魔……」
　パチュリーの声は側にいないと聞こえないほどに小さかった。
「はい……」
「このまま私が死んだら……あの『テガミ』は燃やしてちょうだい……」
「いいえ、レミリア様の切手をくすねて私が全部送ってしまいます！」
　レミリアの態度に腹を立てている小悪魔が顔を真っ赤にして抗議する。
「だから……そんな事言わないで下さいよ」
　悲しそうに、寂しそうにそんな事を言うパチュリーを励ますように、小悪魔はつとめて明るい顔をする。
　いつの間にかパチュリーは泣いていた。アリスへの思いを、無念を、滲ませて。
「パチュリー様……好きな方がいたのですね。何故一緒にならなかったのです?」
　小悪魔も勘付いていた。例え直接パチュリーの口から語られずとも、箱に詰められた「テガミ」が教えてくれたから。

「言えなかった……私はきっと、足手まといになるから……。アリスも言わなかったわ……」
アリスは呆然とした。抱いていた思いは、同じものだったのだ。アリスが貧しさ故にパチュリーの負担になると考えていたように、パチュリーもまた、病弱故にアリスの負担になると考えていたのである。
「その時こそ、『テガミ』を書けばよろしかったのに……パチュリー様？」
気付けば反応がなく、目を閉じたままのパチュリー。とても静かで、安らかな寝顔をしている。
「眠ったのですか……？」
更に場面は変わる。パチュリーの姿はなく、そこには小悪魔ひとりが立っていた。手にはあの「テガミ」が詰まった箱。空っぽになったパチュリーのベッドからそれを抱えて持ち出す。
廊下を通り過ぎる時、小悪魔はふと脇の部屋に目を遣った。姉妹が何やらやっている。
「どう、紫髪！　綺麗？」
「似合うわよフラン、完璧ね」
「ノーレッジ家の融資を止められるわけにはいかないわ。その間にいい金ヅル女を探さないと……」

＊

映像はそこまでで終わっていた。
リグルはアリスを見る。アリスの蒼い眼には強い光が宿っていた。決意と、怒りのこもった強い光が。悲しみに耽ることなく、行動を起こして決着をつけんとする、強い光が。
「食べなさい」
「アリスさん……？」
野菜と肉のソテーが山盛り、リグルの前に出された。
「食べたらちょっと付き合いなさい」
アリスはぱんを手を鳴らし、人形達を呼びつける。戦闘体制の人形たちが、ずらりと並んだ。
「行くわよ、レミリアの所へ」

＊

「初めまして。レミリア・スカーレットよ」
幻想郷のどこかにある高級レストラン。幻想郷の権力者と名高い博麗の巫女が招かれ、レミリアに接待を受けている。
「（こいつが幻想郷の権力者？　権力者って聞いたから金持ちだと思っていたのに、貧乏そうな巫女じゃない。とにかく上手いことやらないと……）贈り物よ」
豪奢な机の上には、美しい紅い指輪の箱が差し出された。
「あら、綺麗な指輪」
光りものとは縁のなかった霊夢は、指輪を手に取りうっとりと眺める。
「でもいいの？　あんた確か結婚したはずじゃ」
「妻とは近々別れることになってるの」
臆することなく、堂々と嘘をつくレミリア。
「あら、大変ね」
「まさか、ホッとしてるわよ」
べらべらと嘘を並べ立てる。近付く者がいることなど、気付かずに。
「男遊びと金使いの荒い、派手な女でね」
くつくつと笑いながら語るレミリアの背後から、ゆらり、影が伸びる。怒りの形相をたたえたアリス、リグル、そしてチルノが、並んでレミリアの背後を囲んでいた。
そして。
一撃。仕込んでいた人形が総力を挙げてレミリアに突撃する。いくら身体の丈夫な吸血鬼といえど、これには耐え切れずに吹き飛ばされて向こうのテーブルに激突した。ガシャンと派手な音を立て、食器が落ちて割れていく。
「失礼します。その指輪、いいですか？」
リグルは派手な音を立てるレミリアには目

もくれず、大袈裟に床を踏み鳴らして霊夢の所まで歩いてくる。指輪の箱を前に銃を構えるので、霊夢も一瞬怪しんだがその場の成り行きに任せることにした。

「暴け、赤針！」

　心弾の名を叫ぶ。紅い光が弾けて映し出されたヴィジョンには……。

『一番安いガラスのやつね』

『よろしいので？』

『本物やるほど価値のある女じゃないでしょ。大体巫女なんだから宝石なんて似合わないわよ』

　レミリアと宝石商のやり取りが見える。馬鹿にされていたと知るや否や、霊夢は目を吊り上げ、まだ倒れたままだったレミリアを何度も踏みつけた。

　そしてそんなレミリアに追い討ちをかけるように、リグルは告げた。

「数日もしないうちに、ノーレッジ家からスカーレット家への融資を止める通知が届きます。送金はもう、二度とありません」

「テガミ」を通して「こころ」に触れたリグルもまた、レミリアへの怒りでいっぱいだった。そのため声は自然と冷たくなる。子供とは思えない落ちついた怒りに満ちた声だった。

　レミリアは、突然の乱入者から殴られた衝撃と宣告に、暫く愕然としていた。

＊

　ところ変わって紅魔館。ビロードの四人掛けの椅子に、フランドールが思い切り羽を伸ばして座っている。そんな彼女と向かい合う、守衛長に率いられた妖精メイドが大勢。

「フランドール様」

「ん、何……？」

「失礼ですが、もう六十日分、私達の給料が払われておりません」

　スカーレット家の守衛のガラが悪いというのは恐らく、主人のこうした態度に苛立ちをつのらせていたからなのだろう。妖精メイドを率いる、紅髪の守衛長はともかく、妖精メイド達の空気はぴりぴりと張り詰めている。

　して、フランドールは。

「二十五日後にはパチュリーのところから入金があるわ。そうしたら払うわよ」

「では、それを信用していいんですね？」

「当然よ！」

　疑り深い守衛長に対し、何ら問題も無さそうに言うフランドール。彼女はまだ、裏で既にノーレッジ家の送金が止まるという決定が下されたことを知らない。

「では……もし次も支払いが滞った場合は、どうなさるおつもりで？」

　恐らく事実を知っているのだろう守衛長と妖精メイド達は、僅かに邪悪ささえちらつかせた笑みを浮かべてフランドールに詰め寄る。

　だがフランドールは全く臆することは無く、下種を見るような目で一同を見回し、

「この館から私のおもちゃまで、何でも売り払って支払ってあげるわよ！」

「その言葉、お忘れなく……」

「はいはい、心配性ね！」

　妖精メイド達は腹の底で嘲笑っている。何も知らない、傲慢で無知な小娘。今に無給でこき使った罪を思い知るがいい、と。

＊

「ではアリス・マーガトロイドさん、確かに渡しましたよ。パチュリーさんの『テガミ』……」

　決着をつけ、パチュリーの心を踏みにじった女に借りは返した。彼女を利用していたパイプも断ち切れた。だが、パチュリーを救えなかったアリスの悲しみは、断ち切れずにいる。「テガミ」を受け取ったアリスは、それを黙ったまますっと眺めていた。

「私はあの時、一緒になろうと言えなかった」

　魔法の森の入り口まで差し掛かった時、不

意にアリスが口を開いた。
「金が無くても自信が無くても、恋人として言うべきだったのに」
　俯いたアリスの口から零れた後悔は、「テガミ」に吸い込まれていく。
「パチュリーの『テガミ』と一緒に生きていく。私にできることはもう、それしかないのよ……」
　無念そうなアリス。だが、リグルははたと閃いていた。
「ありますよ！　そうか、アリスさん、勘違いを……。あるんです！」
「？」
　何があるのかと、アリスは首を傾げる。アリスの家はもうすぐ、既に木々を分けてその姿が見えている。
　ふと、そこに二つの人影が見えてきた。背はそんなに高くない、二つの影。その正体がわかり、アリスの目が見開かれる。
　果たしてその人影の正体は、涙を流して喜ぶ、パチュリーと小悪魔であった。
「小悪魔さんが自警団に相談して、離婚を申し立てていたんです。パチュリーさんが連れ戻されないよう、離れたところのお寺にかくまってもらっていました」
　夢のような再会に立ち尽くすアリスの横で、リグルが説明を加える。
「よかったな！　にせものがばれたから、あいつらももうさよならだ」
　アリスは涙を流しながらパチュリーの元へ駆け寄った。数年ぶりに再会し、抱き合うことができた二人……お互いが離れないように、強く抱きしめる。
「リグル……今度来た時はとびきりのお茶とケーキを用意して待ってるわ……」
　静かな魔法の森で、アリスとパチュリーは暫く、抱擁したままだった。

　こうして、リグル達は「凍結物件」、「アリス・マーガトロイド」宛未配達物件二百四十通の配達を無事に終えた。

《テガミバグ～東方郵便娘　完》

元ネタ…浅田弘幸「テガミバチ」九巻より、第三十三話「凍結物件課」、三十四話「石の愛」

◆後書き

　パロディ特集ということで、本家「テガミバチ」からお気に入りのお話を丸ごとパロディです。
　若干無理矢理とか違和感とかキャラ崩壊！な所はありますが、割といい感じにキャスティングできました。元ネタのフランのポジションの人(元ネタだと旦那の母親です。キャスト参照)がすっごい面白いので是非機会があれば元ネタも読んでみてください。
　あと形としては漫画のノベライズにもなったのですが、初めての試みで……心情描写が書きにくくてなかなか難しかったですね。
　あ、それと紅楼夢来て下さった方有難うございます。なんか郵便娘かなり捌けたのですっごい嬉しいです。次は大９州東方祭、もし来られる方がいらっしゃったら風十五・十六でお待ちしてます。もちろん紅楼夢で出した東方郵便娘の本が出ます（笑）

◆キャスト

ラグ・シーイング…リグル・ナイトバグ
ニッチ…チルノ
ステーキ…配役なし
アリア・リンク…上白沢慧音
カリブス・ガラード…八雲紫
フィリップ・ラノワ…アリス・マーガトロイド
シャズ・ウォルター…パチュリー・ノーレッジ
スカール・ウォルター…レミリア・スカーレット
大奥様…フランドール・スカーレット
ウォルター家会計士…十六夜咲夜
ウォルター家守衛…紅美鈴と妖精メイド
セルマ…小悪魔
ケリー嬢…博麗霊夢
ニッチの姉…レティ・ホワイトロック

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

リグルこそがホタルのお姫様
貴キ　p2

何か今回も色々とごめんなさい…

蟲恋し神様
Step　7p～10p

話は全く繋がっていませんが、一応Nightbug９月号に掲載いただいたマンガの続編にあたります（いじってたら結果的に全く別ものになってしまいました）よろしかったらそちらも御覧下さい。

サクリティア
13　11p

はじめまして、１３ではありません、13です。
死楽のお父さんやってます。おいそこのお前、僕を人間椅子にしてみろ。
紅楼夢で配布した漫画なんで来月からお父さんがんばるよ。

リグルとけーね
ぼこ　12p

背景なんて描けないです、落ち葉なんてもっと描けないです・・・ううっ

『まんがファンタジア』
斑　21p～26p

元ネタの雑誌が幻想入りした事を受けて描きました
漫画自体はまだ続く様なので一安心ですが、
あやめちゃんポジションがチルノなのは確定事項だと思います。

ＧＳリグル　極楽大作戦！！
猫屋敷　27p

『極楽大作戦!!』はパロディのある漫画といえばこれ、という位に影響を受けた作品です。連載終了から10年経ちますが未だに大好きです。
妖怪もいっぱい出てきますし。あと紫は初描きです…へちょ絵ですが。
リグル「……ところでガールズサイドってどういう意味かな？」

リグル対トリシューラ
羅外　28p～33p

デュエル漫画を描こうと思ったけど、途中で力つきました。
ごめんなさい。

Wrigg Shaddai
豆板醤　34p～35p

もしかしたらかぶってるかもしれないけど・・・いいや

無題
草加あおい　36p～39p

毛利三兄弟にプリバを当てようと思ったら出ていなかったでござるの巻。
Ｑ：学園モノに触角で大丈夫か？　Ａ：大丈夫だ、問題ない。
ケモミミやエルフ耳だって居るくらいだ

東方茶湾虫
クロツク　40p

この場をお借りしてpreludenanoさんに全力で土下座します。

愛されリグルコレクション
preudenano　41p

漫画家が原稿を落としてしまい、編集者が急遽組んだ特集ページのパロディ（分かりにくい！）。文章としては作者の意に反して適当なことをつらつらと勝手なことを書いています。

無題
夜行　55p

秋はいいものです。あらゆるものが生を諦めて死んでいく、その刹那の輝きに満ちています。人の温もりが恋しくなるのは、自分の生が希薄になるからかもしれませんね。

表紙
小崎

じゃあぼくはそろそろ散髪しようと思ったところから3週連続で店に行きそびれている人のパロディ！
あと先月お伝えしたハトですが、七英雄のワグナスでした。
まさかと思いましたが、BGMは当時のままでしたね。

NEXT▶ 次号12月号は11月22日（月）発行予定！

※次号の投稿締切は11月15日(月)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

燃える空
乾いた風
金木犀の香り
さざめく影
窓の明かり
誰かの笑い声

月刊NIGHTBUG 2010年11月号

2010年10月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作 上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

ADDA
イリイチ
キッカ
ミナモ
貴キ
蛍光流動
残虐非道の貴公子
怒羅悪
東
preudenano
クロツク
草加あおい
豆板醤
猫屋敷
斑
羅外
Salka
くろと
夜行
13
Step
ぼこ
小崎